

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第5章「命」

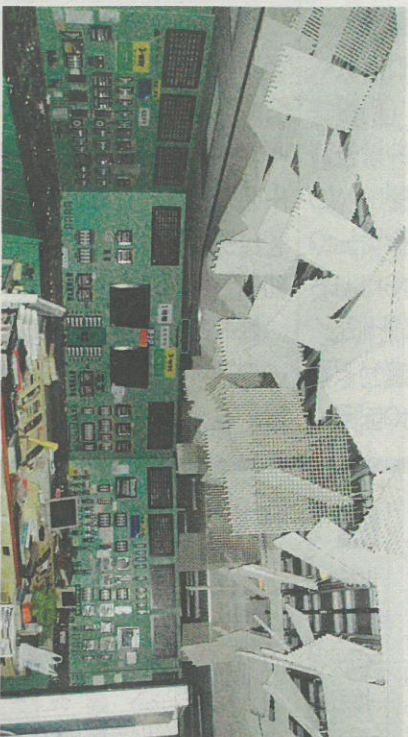
3月15日早朝、福島第一原発免震重要棟2階の会議室には各号機の運転員たちがいた。

建屋の爆発や放射線量の上昇のため、中央制御室での原子炉監視は13日夕から主任以上の運転員による交代制となり、次の交代に向けて待機していたのだ。

1、2号機中央制御室で対応に当たってきた作業管理グループの大野光幸(51)は、当直長の伊沢郁夫(52)に話し掛けた。

「伊沢さん、事故の後、奥さんと話をしたんですか」「いや」「話さなきゃ駄目ですよ。番号覚えてください」

## 覚悟の残留



# 当直長「俺は、残る」

伊沢が立っていた。その顔を見た瞬間、大野は伊沢がい防護服着たが、大声で誘導している伊沢は東電の青い作業服を着ていた。伊沢の覚悟を物語っていた。残る」とか何を意味するのかも分かっていた。大野は伊沢から電話番号を聞き出す目だった。

大野は伊沢の手を握って言った。「伊沢さん、必ず戻ってこいから。必ず、また、くっかえ」

「分かった」。伊沢はそう一言、答えた。大野はほんのわずかな時間、退避手順を聞いた後、免震棟1階に向かった。

大野は退避する社員でこた返す。林崎は退避する社員でこた返す。1階の出入口付近で、誘導に当たった。免震棟からの退避が始まり、大野も出るようになった。廊下に出ると

伊沢当直長らがとまっていた1、2号機中央制御室。1号機の爆発で天井のハネが落ちた。2011年3月12日(運転員提供)

退避する社員たちのほとんどは白

「俺は、残る。君は出なさい」

「絶対、外で会いましょかね」

「分かった」

「約束ですよ」

念を押したが、伊沢の返事はなかった。

免震棟を出ると、ぼりぼりとした放射線物質を含んで高線量となっていた。(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 国分伸矢)